

# 台湾人日本語学習者の発音における自己モニター —そのプロセスにおける問題点および問題解決に向けての行動—

早稲田大学日本語教育研究科 徐センニ

## 第1章 序論

第1章では、本研究の研究背景および研究目的について述べる。

筆者が自身の経験から、学習者の中には、発音を気にしない学習者もいれば、発音に注意を払い、上達したいという意欲を持ち、自らの発音に対して高い到達目標を設定している学習者もいる。そして、そのような意欲を持っている学習者の中には、積極的な姿勢で発音学習に取り組んでいながらも自身の目標に達することができていない、と思い悩んでいる人が数多くいると気づいた。そこで、筆者は向上意欲を持っていながらも上達に繋がらない原因とは何かと疑問に思い、そのような学習者を研究の対象としたいと考えるようになった。

また、学習者が日本語を話しているときは発音に対してどのような意識があるのかについて振り返りを行った結果、自分が発音する際に考えていることが「自己モニター」のプロセスに似ていると思い、興味を持ち始めた。日本語学科の友人との雑談の中で、「発音が変だと先生によく言われるから直したいと思うが、どこが変なのかわからない」、「自分でも何か違うと思うが、どうすれば発音が良くなるのかわからない」という話をよく耳にしたことから、筆者は、発音に対する向上意欲を持っていながらも発音を上達させることができない学習者は、発音における「自己モニター」のプロセスにおいて何らかの困難や問題があるのではないかと考えた。

さらに筆者自身が受けてきた台湾の日本語教育の現状を見ると、総合的科目以外にも文法、会話、日本文化や歴史、翻訳などの授業が設けられているが、発音に特化した授業がほとんど設置されておらず、発音学習に関する教材開発もあまり進まれているのがわかる。つまり、前述のような発音学習に関する悩みや発音に対する学習意欲が満たされていないままであり、学習者のニーズに応えた音声教育はまだ実現されていないと考えられる。

以上のことを踏まえて、本研究では台湾人日本語学習者を対象にし、自己モニターという視点から、発音に対する向上意欲を持ち、発音学習に積極的に取り組んでいながらも自身が設定した目標に辿り着けない学習者(以下、学習者)が発音の聴取・産出の過程においてどのように考え、行動するのかを明らかにする。具体的には、以下の3つの研究課題を明らかにする。

- (1) 学習者は、自己モニターのプロセスにおいてどこに問題を感じているのか。また、その問題に関連する要因は何なのか。
- (2) 学習者は、問題を解決するためにどのような行動を取るのか。また、問題を解決するために取った行動は自己モニターのプロセスにおいてどのような役割を果たしているのか。
- (3) 行動を取った結果、学習者は問題を解決することができたのか。また、その結果に学習者はどう対応するのか。

## 第2章 先行研究

第2章では、自己モニターおよびその概念を応用した先行研究、台湾における日本語教育および日本語の音声教育に関する先行研究をまとめたうえで、本研究で扱う自己モニターの定義および本研究の位置づけについて述べる。

自己モニターを定義するものとして、O' Malley&Chamot(1990)は、「自己モニタリング」は理解と産出の両方において使用されていると強調した。小河原(1998)は発音における自己モニターを「学習者が妥当な発音基準を意識的に持って発音し、発音した自分自身の発音が基準どおりにできているかどうか自分で聴覚的に判断し、自己修正すること」と定義した。朴ほか(2006)は、第二言語の発音における自己モニタリングを理解と産出の両側面の行動であるとしたうえで、その具体的な活動を示した。

以上の先行研究を踏まえて、筆者は本研究で扱う自己モニターの定義およびそのプロセスを以下のものとする。

さらに、自己モニターの概念を応用した研究において、まず、学習者へ実験を実施して統計的手法を用いて分析し、自己モニターの学習への効果を検証している研究が多くなされてきた(小河原1997a, 199bc, 1998、佐藤2001、朴ほか2006)。また、自己モニターの概念を取り入れた教室活動による研究成果も多く見られている(松崎2002、徐2004、房2004、神山2005、ボイクマン2009、房2012)。

発音に注意を向けて言語を使用する際、聴取と産出の両側面において「自己モニター」が働く。聴取においては、①既存の聴取基準を持って音声の注目すべき音声的特徴に注意を向ける、②その音声が基準と違いがあるか判断する、③既存の聴取基準を固める、または修正する、というプロセスである。産出においては、①聴取基準に基づいて築かれた発音基準によって発音する、②その発音が基準どおりに発音できているかどうか聴覚的に判断する、③何らかの逸脱を感知した場合、発音を修正する、というプロセスである。

しかし、これまでの先行研究は「指導者側」や「教室場面」から見ているものが多く、「意欲を高める」

ことや「自己モニターを促す」ことの重要性を強調し、「自己モニターを促すような指導」の効果に重点を置いている。それに対して、そういった意欲が発音能力の向上に繋がらないという学習者が数多くいるというのが現状である。発音学習に積極的に取り組んでいる学習者は教室外においてそれぞれどのような意識で自己モニターをしているのか、また自己モニターが行われている際にどのような問題にぶつかるのかについて着目した研究は少ない。そのため、本研究では、積極的に発音学習に取り組んでいながらもなかなか自身が設定した目標にたどり着けない台湾人学習者を研究対象とし、発音に対する向上意欲を持っていながらも発音の上達に繋がらない原因を自己モニターという角度から探る。つまり、そのような学習者は発音の聴取、産出の過程においてどのように考え、行動するのかを明らかにする。

### 第3章 研究方法

第3章では、本研究の調査で用いた研究方法の説明、調査の概要および分析方法について述べる。

3つの研究課題を明らかにするために、本研究では質問紙調査とインタビュー調査という2つの調査を行った。

学習ダイアリーの手法を用いた質問紙調査では、学習者に一定期間学習ダイアリー(language learning diaries)を記入してもらうことによって、①普段の生活においてどのような意識で自身の発音をモニターし、②その過程においてどのような問題を感じており、③どのように解決しようとするのかを明らかにすることを目的とする。

インタビュー調査では、学習ダイアリーで反映しきれていない学習者の意識や考えを言語化してもらい、学習ダイアリーから得られたデータを補足することを目的とする。

本研究の調査協力者は、東京の某私立大学の日本語教育研究センターで設置される発音クラス<sup>1</sup>を受講中または受講した経験がある台湾人学習者3名で、その概要は以下のとおりである。

仮名	性別	年齢	出身地	日本語レベル	日本滞在歴
アイコ	女	25	台北市	中級	10ヶ月
ユイ	女	23	苗栗県	中級	1年
ヒロ	男	22	台北県	上級	10ヶ月

質問紙調査は、協力者に学習ダイアリーのWordファイルを電子メールで送付し、できる限り学習ダイア

<sup>1</sup> 当大学の日本語教育研究センターでは、外国人留学生向けの日本語クラスが数多く開かれており、発音クラスは必修科目ではない。それにも関わらず発音クラスを履修する学習者は、発音学習に積極性を持つ学習者である可能性が高いと筆者が考える。

リーを1ヶ月の間に毎日記入してもらった。記入してもらった内容は、協力者自身の日常生活の中で日本語の発音に関して気になったことや困ったこと、また困ったことをどのように解決しようとしているのかについてである。

インタビュー調査は、協力者それぞれに学習ダイアリーを記入してもらっていた1ヶ月の期間中、2週間毎に記入してもらった学習ダイアリーの内容に基づいて半構造化インタビューを行った。

最後に、本研究本研究では佐藤(2008)の質的データ分析法を参考にし、データを以下のように分析した。(1) 分析観点を定める。(2) 分析データを読み込み、本研究の研究課題に関連するものを選出する。(3) 協力者それぞれの語りを6つの分析観点に基づきグループを編成する。(4) グループごとに各協力者の語りをコーディング<sup>2</sup>し、カテゴリーを作成する。(5) 各カテゴリーの相互の意味関連を考え、理論を構築する。

## 第4章 分析結果

第4章では、協力者3名の分析結果について述べる。

まず、学習者は発音における自己モニターにおいて、聴取および産出のすべての段階に問題を感じていることがわかった。また、問題に関連する要因は誤った知識による基準の間違い、知識と応用のギャップ、母語の影響、日本語の難しさ、発音の難しさ、情意フィルターの高まりなどが見られた。

次に、問題を解決するために、学習者はさまざまな行動を取ったことがわかった。また、その行動の多くは基準に作用していることも明らかになった。

最後に、問題を解決するために行動を取った結果、学習者自身が満足できないものが多かったが、学習者は諦めずに同じ方法を使い続けたり、自ら解決方法を提案する姿勢を見せた。

## 第5章 考察と結論

第5章では、協力者3名の分析結果をまとめたうえで総合的考察を行い、本研究の結論について述べる。そして、本研究の日本語教育への示唆および今後の課題について述べる。

まず、問題を感じている箇所および関連する要因において、(1) 学習者は聴取および産出のすべてのプロセスにおいて問題が起きている、(2) 学習者の発音における自己モニターのプロセスの各段階は連動しているため、問題が起きた箇所と感知される箇所が異なる場合があることが明らかになった。

---

<sup>2</sup> コーディングとは、「文字テキストデータに対して一種の小見出し(コード)をつけてゆく作業」である。(佐藤2008 : 33)

次に、問題解決に向けての行動および行動の役割において、行動には個人差が見られたが、そのほとんどが基準に作用するものであることと、自己モニターのプロセス自体から離脱している回避の行動が共通して見られた。

三つ目に、学習者が問題を解決するために行動を取った結果、満足できていない場合が多かったが、まだ問題解決には至っていないが、問題を解決するための途上にあると考えられるため、それを否定的に捉えるべきではないと考えられる。

本研究の成果をふまえて、日本語教育において、以下の2点が示唆できる。

(1) 本研究では、日本語起源の借用語の多い台湾の特殊な言語環境は台湾人日本語学習者の自己モニターへのマイナスの影響が見られたが、それを否定的に捉えるのではなく、自身の生活に溶け込んでいる親しみのある言葉は日本語と密接に関わっていることを気づかせ、両者の相違点を意識化させる必要があることが示唆された。

(2) 本研究では、学習ダイアリーは学習者の意識化や内省を促すという点と、自身の発音をメタ的に捉えられる点で意義があることが示唆された。そのため、学習ダイアリーは教室活動においても活用できると考えられる。ただし、フィードバックや振り返り活動などの工夫が必要である。

最後に、今後の課題を述べる。

(1) 本研究を通して明らかになった学習者の直面している困難をどう対処していくべきかを検討する。

(2) 学習ダイアリーを用いた具体的な活動案を提示したうえで実践し、日本語教育現場でどの応用するかについて考えていく。

## 引用文献

小河原義朗 (1997a) 「日本語発音学習における学習者の自己評価」『言語科学論集』第1号, pp. 27-38, 東北大学大学院文学研究科言語科学専攻.

\_\_\_\_\_ (1997b) 「発音矯正場面における学習者の発音と聞き取りの関係について」『日本語教育』第92号, pp. 83-94, 日本語教育学会.

\_\_\_\_\_ (1998) 「日本語学習における発音学習ストラテジーの有効性の検討」『言語科学論集』第2号, pp. 1-12, 東北大学大学院文学研究科言語科学専攻.

神山由紀子 (2005) 「コミュニケーションのための発音指導実践—学習者の気づきと意識化を追って」『早稲田大学日本語教育実践研究』第3号, pp. 131-140, 早稲田大学日本語教育研究科.

佐藤郁哉 (2011) 『質的データ分析法—原理・方法・実践—』新曜社.

- 佐藤友則 (2001) 「音声評価基準の習得過程に関する考察」『第二言語としての日本語の習得研究』第 4 号, pp. 134-149, 凡人社.
- 徐珉廷 (2004) 「モニターを通して学習者は何を学ぶのか—ロールプレイに焦点を当てて—」『昭和女子大学大学院日本語教育研究紀要』第 2 号, pp. 19-28, 昭和女子大学.
- 朴瑞庚・坪田康・壇辻正剛・大木充 (2006) 「韓国人学習者による日本語母音長の知覚と産出における自己モニタリングの効果」『音声研究』第 10 巻 第 2 号, pp. 5-18.
- 房賢嬉 (2004) 「発音学習におけるグループモニタリング活動の可能性—学習者の意識の変化を中心に—」『言語文化と日本語教育』第 27 号, pp. 129-143, お茶の水女子大学日本言語文化学会.
- \_\_\_\_\_ (2012) 「発音学習における自己モニタリング力を自分のものにす (appropriation) 過程—ピア・モニタリング活動への参加の仕方の変化から—」『2012 年度日本語教育学会春季大会予稿集』 pp. 109-114, 日本語教育学会.
- ボイクマン総子 (2009) 「モニター能力を育成するための教室活動とフィードバック—中級前期の会話授業の実践—」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』第 24 号, pp. 97-114, 筑波大学留学生センター.
- 松崎寛 (2002) 「リピートのとき学習者は何を考えて発音しているか」『広島大学日本語教育研究』第 12 号 pp. 33-41, 広島大学大学院教育学研究科日本語教育学講座.